

第1学年 国語科指導案

日時 平成19年10月12日(金)公開授業1
生徒 上野中学校 1年B組
男子18名 女子17名 計35名
指導者 教諭 畠山 陽

1 単元・教材名

古典との出会い「いろは歌」「蓬萊の玉の枝」「竹取物語」から—
「今に生きる言葉」(光村図書「国語1」)

2 単元について

(1) 教材観

生徒たちにとって古典を本格的に学習する最初の機会である。この機会に「古典はおもしろい」ということを感じることで、今後の古典学習に受け身ではなく積極的に自分から問題意識を持って読んでいく態度を養うことができる。

また、『竹取物語』は作品名に記されているように、声に出して語られた作品である。例えば、頻出する『なむ』は語りにかかわる強調の言葉であるし、指示語の頻用(その・それ)、接続助詞(て)の頻用、長く続く文、文末の簡潔さなど、語り、あるいは読み聞かせにかかわる表現の特徴をもっている(光村図書中学校国語学習指導書1下より引用)。そのため、リズムカルな文体で、展開も明確であり、原文を音読することがとても楽しい。何度でも読み返し、時に感情を音声で表現することで「おもしろさ」を感じる古典入門期の教材として適切である。

原文とともに現代語訳が乗っており、現代語での要約文とあわせて物語全体のあらすじが分かる構成になっているが、実はこの「現代文」こそが生徒にとっては確実な理解が困難な内容である。「現代語だからまちがえずに読み取れるだろう」と思い込まず、古典における現代文を確実に読み取ることが真の意味での古典の理解だと考える。

(2) 生徒観

国語の授業では毎時間終結5分程度「五色百人一首」に取り組んできた。どの生徒も意欲的で、古文の文体への抵抗はなく、また「いふ」、「あはれ」などのように現代語と読み方が違うひらかながあることに気づいている生徒も多い。

また、毎時間導入5分で「寿限無」、「雨二モマケズ」などの早読みを行ってきた上に、どの教材でも意図的に音読の機会を設けてきた。したがって、「音読すること」には抵抗がないが、あくまで「指示待ち読み」であり、「声に出すとおもしろいから音読する」意識を高めるためには教師からの働きかけが必要だと考えていた。

課題に積極的に取り組み、解説もしっかり聞く態度をもっている生徒たちであり、その良さを生かして課題も多く仕掛けてきた。「古典」の授業でも課題を多く細かく用意し、生徒が「がんばった」と自己評価できる場面を作りたい。

(3) 指導観

「個に応じた手だて」について

- ・ **指導形態の工夫** 音読の場面においては「何度繰り返してもその都度新しい発見がある」という気持ちをもたせるため、どの教材でも早読みや指名なし音読や群読など、様々な読み方を提示して取り組ませたい。そのなかで少人数グループでの「読み聞かせ」の場や、メディアを活用して教師は机間指導できる場を設定し、お互いに学んだり積極的に教師から指導を受けられるようにしたりして音読に対する意欲を養いたい。
- ・ **個を生かす場面** 「いろはうた」を筆で視写したり、「蓬萊の玉の枝」でプリント学習を入れたりなどして、音読を重視する中にも他の方法でも古典に親しめる場面を入れ、古典に親しむアプローチの方法を提示していく。
- ・ **学習評価の工夫** 物語の内容を理解しているかについては、プリント学習に取り組ませ、すべて解けた生徒から教師に採点してもらうシステムを組む。お互いに教え合ってもよいことにしており、最終的には全員が課題をこなすことを目指す。年度当初から意図的に授業に組み込んできた方法であり、生徒は抵抗なく取り組める。

「評価の生かし方」について

- ・ 音読でのグループ「読み聞かせ」では、自己評価や他者評価をメモできるようにし、折にふれて教師評価をする。情意面に重きを置く内容なので、後ろ向きな自己評価をしている生徒には励ましのコメントをした上で、次回の音読の場面で働きかけるようにする。
- ・ 内容理解に関わるプリント学習では、全問正解者の方も含めて全員のプリントを授業の最後に回収する。時間内に課題を終わらせられなかった生徒のプリントには赤鉛筆で答えを記し、返却時に「上からなぞる」ことを指示する。

3 単元の目標

- (1) 「声に出して読んでこそ古典はおもしろい」という実感を持ち、別の文章を読む関心を持つ。
- (2) 古典の作品を読み、展開に即して内容をとらえ、作品に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広める。

4 単元の指導計画(全10時間)

- 第1時 「いろは歌」冒頭を読み、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いを比較し、理解する。
- 第2時 「いろはうた」の原文と現代語訳を聞き比べ、「蓬萊の玉の枝」の原文と対訳を視写する。
- 第3時 竹取物語の冒頭文を読み、言葉の意味や文脈を理解し、暗唱する。
- 第4時 五人の貴公子の冒険談をワークで確認し、「くらもちの皇子」の位置づけを知る。
- 第5時 「蓬萊の玉の枝」の原文と口語訳を比較しながら、内容を理解する。(本時)
- 第6時 翁との別れの場面を読み、人物の心情に迫る。
- 第7時 物語の最後を読み、原文と比較し、文中にない部分の心情や様子を考える。
- 第8時 「矛盾」を読み、あらすじを理解し、漢文調の文体の書き下し文を味わう。
- 第9時 便覧を使って故事成語の意味と成り立ちを調べる。
- 第10時 調べたことについて発表し、全体のまとめをする。

5 題材の評価規準

単元・題材名	蓬萊の玉の枝 「竹取物語」から
題材の目標	(1) 古典の文章に出会い、昔の人のものの見方や考え方にふれ、現代とのつながりを考える。 (2) 古典の作品を読み、展開に即して内容をとらえ、作品に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広める。
主な学習活動	(1) 「竹取物語」を読み、物語の面白さや現在の表現との違いを味わう。 (2) 登場人物の様子や心情を自分と重ねて考えたり、原文にふれ、教材文にはない部分の様子や心情を考えたりする。
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> 教材文を読み、教材そのものおよび古典特有の言葉に興味を持つ。(興味・関心・態度) 語注や現代語訳を参考に物語のあらすじをつかみ、内容を理解した上で音読している。(読むこと) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めたり、古語の意味や言葉遣いを理解している。(言語事項)
評価の方法	<ul style="list-style-type: none"> 音読の評価カード 古文単語の小テスト 内容に関わる学習プリント

6 本時の目標

(1) 目標

くらもちの皇子の冒険談の内容を、古文を現代語訳へ、現代文を古文へと対比しながら読み取ることができる。

(2) 本時の評価の観点と具体的評価規準

評価規準	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手立て
国語に対する関心・意欲・態度	古典の文章の文体や表現に関心を持ちながら、内容を読み取ろうとしている。 仮名遣いの違い、今では使わない言葉、現代とは意味の違う言葉を教材文の上で9割以上指摘しようとしている。	古典の文章を現代文に照らし合わせながら文意を読み取ろうとしている。 仮名遣いの違い、今では使わない言葉、現代とは意味の違う言葉を教材文の上で6割以上指摘しようとしている。	グループ学習の際に声かけをしたり、自己評価カードにコメントしたりする。 小テストを繰り返し、得点が伸びるように言葉がけをする。
読むこと	文意を読み取った上で古典の文章の文体や表現に関心を持ち、話者の表現の工夫を読み取っている。	古典の文章を現代文に照らし合わせながら文意を読み取っている。	お互いに教えあえる雰囲気の中で教えあう。それもできない生徒にはコメントを書き込む。

(3) 展開

: 評価 : 手立て

	指導内容	生徒の学習活動	留意事項と評価・手立て
導入 10分	1 早読み	・ 「竹取物語」冒頭文を2人1組・交代で早読みの読み聞かせをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2学期当初からの反復で、本時で9回目。毎回タイムを記録する。本文は教科書ではなく、「齋藤孝の脳生き生き大人の音読プリント(小学館)」による。頭を活性化させるのが目的なので、特に評価をしないが、モチベーションをあげる言葉がけを意識する。 ・ 同じテストを3回行い、3回目の得点で「意欲」を評価する。
	2 小テスト	・ 教材文全体に出てくる重要語句の意味を問う10問テストを行い、隣同士で採点する。	
展開 35分	3 課題設定		<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時に「くらもちの皇子の嘘は一度はかぐや姫までも信じさせた」ということを学習したことを振り返る。 ・ DVDは指導者による自作。授業での「教師に続いての音読」をイメージしたもの。教師は机間指導をおこなう。 ・ 全文を読んだ後でも「発問の意図」が分からない生徒が多いようならば、補助説明をする。 ・ 相談は積極的に促す。 ・ 座った生徒の線を引いた部分を確認して回る。 ・ 適度な時間で座れない生徒を座らせ、答えを確認した上で線を引かせる。 ・ 1問ごとに解いた生徒にもってこさせ、付けをする。
	学習課題:「くらもちの皇子」の嘘のうまさを分析する。		
	4 原文および対応する現代文の音読	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書の現代文の一斉読みをする。 ・ DVDに続いての原文の音読を2回行う。 	
	5 課題を設定した上での一斉微読音	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次の課題を板書し、起立させ、「全文を読み、答えに線を引いた生徒は座って良い」と指示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>くらもちの皇子が「蓬莱の玉の枝」がにせものだとはれないようについた嘘「一文」はどこか。</p> </div>	
6 プリント課題に取り組みさせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 答えの確認 ・ 下記の3問について、答えを書かせるプリントに取り組みさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>問1:くらもちの皇子があえて「いとわろかりしかども」と言ったのはなぜか。 (前半を穴埋め、後半を記述式にした解答方法)</p> <p>問2:くらもちの皇子の語りの中で、もう1つ「巧みな嘘」があるが、どのようなことか。</p> </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>読むこと くらもちの皇子の巧みな嘘が読み取ることができる。 Cの生徒への手立て</p> <p>他の生徒と相談したり教わったりして良いこととする。 それでもこなせなかった生徒のために、全員のプリントを集め、問1のみ正解を赤ペ</p> </div>	

		<p>(書き抜きと理由を記述式にした解答方法)</p> <p>問3:この話を踏まえ、うその話を人に信じさせるポイントはどんなところにあると考えますか。自分の考えを3つ書きなさい。</p>	<p>ンで書き、次時に返却してなぞらせる。</p> <p>Bの生徒への手立て 問2について、何回も間違える中で正解を見つける。他の生徒と相談したり教わったりしても良いこととする。</p> <p>Aの生徒への指示 問3(チャレンジ問題)に取り組ませる。</p>
<p>終 結 5 分</p>	<p>7「五色百人一首」をする。</p>	<p>・「五色百人一首」のための席替えをし、1対1の試合を行う。</p>	<p>・終わらなかった生徒も含め、全員のプリントを回収する。</p> <p>・授業を明るく終わることと人間関係作りが目的なので評価はしない。</p>